

少子高齢化社会に対する思春期の意識調査

The Aging and the Baby Bust Society,  
from the View-point of the Adolescent.

和田 由香  
Y u k a W A D A

今 高 國 夫  
Kunio IMATAKA

## 【抄 録】

少子高齢化社会に関する意識調査を行った。対象は、茨城県つくば市近郊に在住する思春期齢を中心とした、10歳～大学生の725人。方法は、アンケート調査による質問紙形式を用いた。その結果以下の9点の結論を得た。

- ①思春期は少子高齢化社会について否定的なイメージを持っていた。
- ②少子化は、健やかな成長に対する負の影響をもたらすと懸念していた。
- ③少子化は、個人の育児体験を減少させ、育児不安を増強させていた。
- ④育児に関して不安や苦痛を認識していた。
- ⑤結婚・育児に関して、思春期の過半数は「結婚したいとは思わない」「子供は望まない」との考えを示した。
- ⑥介護者の負担を気かけながら介護される高齢者の気持ちを、負のイメージで捉えていた。
- ⑦育児や介護のキーパーソンとなる母親の負担を敏感に感じていた。
- ⑧母親の身体的・精神的疲労は、思春期の抱く家庭観や子育て観に負に影響していた。
- ⑨介護をするのもされるのも否定的に捉えており、介護意欲の低下につながっていた。

以上9点の結論は、いずれも思春期の少子高齢化社会に対する負のイメージであり、今後の問題点として検討すべき課題であると考察された。

**Keywords;** Adolescence, Decreasing of the birth rate, Experience for child care, Care for the aged people, Decline in the number of birth

## Synopsis

For the purpose of investigating the thinking of the adolescent about the aging and the baby bust society, a survey was conducted for 725 adolescents from 10 to 20 years old. The findings are as follows:

1. The majority of the adolescent had a negative image about the aging and the baby bust society.
2. They thought the baby bust society was acting as a negative factor to the growth of the young children.
3. The less experience makes the more anxiety for the care for babies.
4. More than half of the adolescent didn't want to be married nor want to have their children.
5. Many adolescents thought the aged people didn't happy in this aged society.
6. The care for the aged people was thought to be a heavy burden not only for the person who offers it, but also the person who receives it.

Although the majority of the adolescent thought the baby bust society was unfavorable, they didn't want to have their own children. They were unwilling to offer and to receive the care for the aged people in the future. It was supposed that the social power to support the aged people was going to decrease in the future in this situation.

## 【緒言】

近年、本邦の老人医療の進歩に伴う平均寿命の伸びは著しく、日本は世界第一の長寿国となった。その反面、同時に65歳以上の高齢人口の増加という新たな人口構成を生み出し、より良い老人介護の環境の整備が緊急の課題となっている。一方、女性の社会進出に伴う晩婚化の傾向は、女性一人当たりの平均出生率の低下という新たな問題に関連し、本邦の女性一人当たりの平均出生率は1.32と、先進諸国でも最も低い値となっている。

この2つの現象は、本邦が現在直面している少子高齢化社会において、介助を必要とする高齢人口の増加に対する介助の担い手となる世代の負担の増加という問題点を生じている。近年の核家族化した社会で生活し、個人の生き方や価値観が多様化した思春期たちは、少子高齢化社会についてどの様に認識しているのだろうか。思春期から見た少子高齢化社会に対する認識の現状について、意識調査を施行したので文献的考察を加えて報告する。

## 【対象・方法】

茨城県内に在住・在学する主に思春期齢10歳～大学生の若者725人（以下思春期と称す）に対しアンケート調査を施行した。アンケートは自記式で、それぞれ小学生時代から現在までの乳幼児や高齢者とのふれ合い体験、高齢者との関わり体験について質問した。また各家庭での介護の形態やその経験などについて自由記述形式で回答を得た。アンケートの内容については質問方法や表現方法において各年齢相当に理解が可能な様に若干の修正を加えた。尚、本調査は平成12年10月から平成13年10月に施行とした。

## 【結果】

### (1) 少子高齢化社会について

少子高齢化社会についてどう思うか質問した。「非常に困ったことだ」32%、「困ったことだ」44%、「どちらでもない」13%、「好ましいことだ」8%、「わからない」2%であった（図1）。若者の76%が少子高齢化時代の到来について「困ったことだ」「非常に困ったことだ」など否定的なイメージを持っていた。理由としては、「経済が悪くなる」「社会が発展しない」「年寄りの面倒を見る人がいなくなる」などが多くを占めた。反対に少子高齢化社会について必ずしも困らないと答えた者の内訳は、小学生31%、中学生22%であり、低年齢ほど、その比率が高かった。

### (2) 少子化の影響

少子化について質問したところ、影響として「子どもが甘やかされる」94%、「社会性が未熟」82%、「親の過干渉、親子の密接化」71%、の回答を得た。一方、「子どもが大事にされるのでよい」という回答は25%であった。

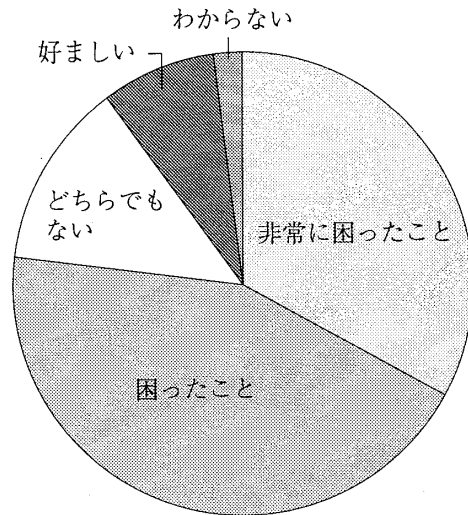


図1：少子高齢社会をどう思うか

### (3) 乳幼児とのふれ合い体験

乳幼児とのふれ合い体験は非常に乏しく「赤ちゃんのお世話をしたことがない」という若者が86%であった。乳幼児との接触の経験としては「抱っこをしたことがある」64%、「あやしたことがある」54%であった。しかし、「オムツを交換する」「ミルク、離乳食の介助」「入浴介助」をしたことがある者はいずれも10%以下と少なく、赤ちゃんのお世話は出来ないと答えた者が92%を占めた。

### (4) 育児中の母親の気持ち (図2)

「あなたは子育てをしている母親の気持ちはどの様なものだと思いますか」との項目については、「子どもがいると楽しいと思う」31%、「子どもはかわいいと思う」22%であった。また育児

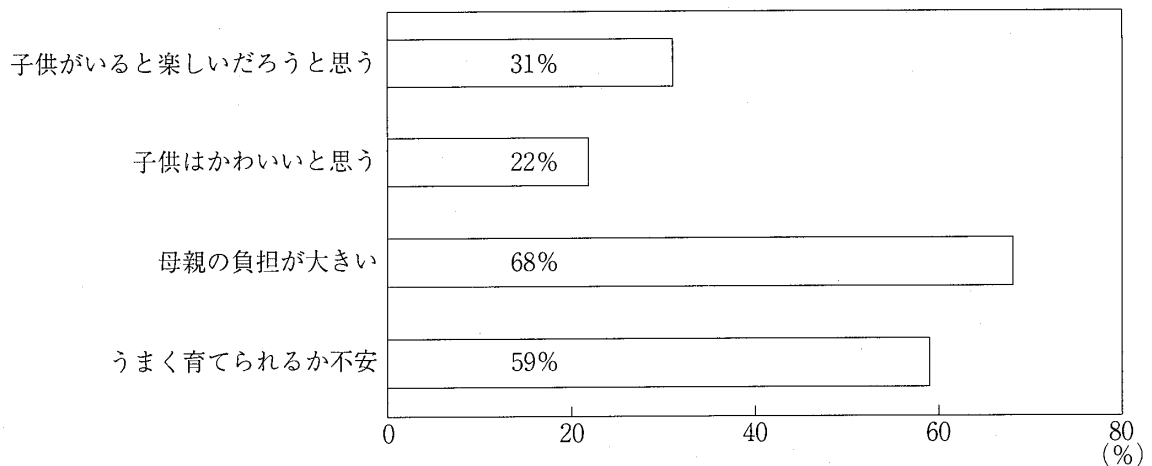


図2：子育てをしている母親の気持ち (思春期の意見)

に関しては、「母親の負担が大きい」69%、「うまく育てられるか不安」59%、「手間がかかって面倒」48%、「早く子どもを預けて社会に出たい」26%であった。

#### (5) 結婚観

将来の結婚・育児に関しては「結婚したいとは思わない」が54%を占めた。理由として男子では「お金がかかる」「養うのは大変」「1人の方が気がラク」という理由が多くを占めた。女子では高校生・大学生と年齢が上がるにつれて「家事の負担が増す」「社会に出たい」「配偶者の親の世話が心配」「自分の親と暮らしたい」などの回答が多かった。

#### (6) 子どもを望むか

「将来子どもを持ちたいと思いますか」の問には「子どもは望まない」と答えた者が66%を占めた。理由としては、女子では「社会に出て働きたいから」が多く、子どもを望まないと答えた女子の85%を占めた。また、男女とも「お金がかかる」「自分の自由が無くなる」「忙しくて面倒」等の回答が50%以上を占めた。「子どもが将来問題を起こすか不安」という回答も散見された。

女子学生の中には「健康面から産めるかどうか不安」という回答が14%であった。健康上の理由として、「月経が不順だから」「現在月経が無いから」「中絶経験があるから産めないかもしれない」「性感染症（STD）の既往があるから」などの理由が挙げられた。また「痩せすぎと言われているから」「体力が無いから」「産むのが痛そうで耐えられなさそうだから」という回答も得た。

#### (7) 高齢者とのふれ合い体験

高齢者とのふれ合い体験について、85%で「お世話をしたことがある」と回答し、「買い物、食事を届ける、部屋の掃除」が上位を占めた。しかし、「着替え」「入浴介助」「排泄の世話」をしたことがある者は、7%であった。

#### (8) お年寄りの気持ち

お年寄りはどう考えていると思うか、という質問に対しては「もっと親切にしてもらいたい」85%、「家族に囲まれて暮らしたい」76%、「さみしい」52%、などの回答を得た。以下、「人の世話になりたくない」「社会は年寄りに冷たい」「迷惑をかけて申し訳ない」という回答も得た。

#### (9) お年寄りの世話をしている人の気持ち

については、図3の回答を得た。

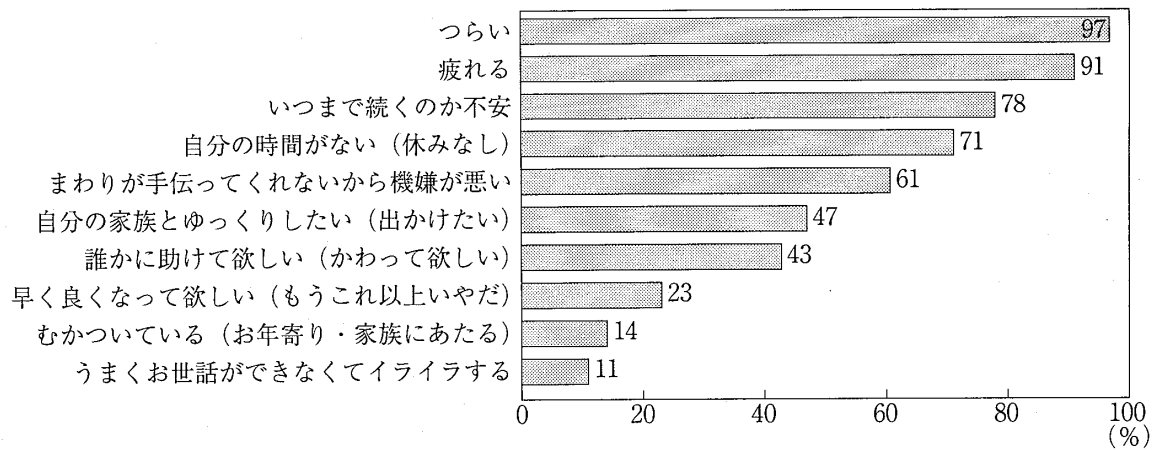


図3：お年寄りのお世話をしている人の気持ち（思春期の意見）

(10) 自分の家庭での介護の経験

「母親が疲れてかわいそうだった」「父親が手伝わないので腹が立った」「体調を崩した人がいた」「病人中心の生活でいやだった」「母親が勤めを辞めた」などの回答があった。

(11) 自分が介護することになったら

「もし介護する立場になったらどうするか」について「出来ない」「しない」が57%を占め、理由としては「途中で嫌になる」「無理だからプロに頼む」「自分の生活がある」などを得た。

(12) 在宅介護を希望するか（図4）

「自分が高齢になったらどうしたいか」については「在宅介護を希望する」が22%、「希望しない」が71%を占めた。

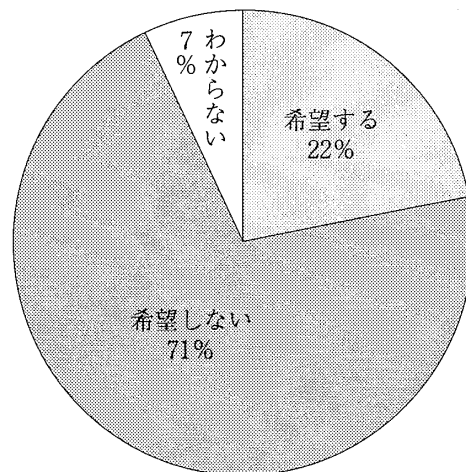


図4：在宅介護を希望するか

## 【考察】

### (1) 少子高齢化について

低年齢層では、「年をとっていても若くてもみんなが仲良く暮らせばよい」「それぞれがいい社会になるように頑張ればよい」等の、意見が散見されたが、全体では少子高齢化が望ましくないとする意見が多数を占めた。この結果は、過去の高齢化への評価に対する調査<sup>2)</sup>と比較して否定的なイメージを抱いている割合が多かった。年齢の上昇とともに、少子高齢化がもたらす社会的な影響をより身近な問題として認識する傾向があり、結果として否定的に捉えている者の割合が上昇していた。

### (2) 少子化の影響について

少子化により、子どもが大事にされるという意識がある反面、社会に対する未熟さ、親の過干渉、親子の密接化がもたらす弊害、等を自分自身あるいは身近な問題として感じている様子が推測された。

### (3) 乳幼児とのふれ合い体験について

「ミルクを飲ませる」「食事を食べさせる」「お風呂に入れる」「オムツを取り替える」など乳幼児の日常的な世話の経験のある者は1割以下であり、少子化の影響で乳幼児と直接関わる機会が少ない現状がうかがえた。

### (4) 育児について

子育て中の母親の感情については育児の楽しさ、素晴らしさなどを認識していたが、実際はつらさが伴うだろう、という回答が多数を占めた。近喰<sup>3)</sup>は愛着と回避の感情で揺れ動く母親の心理状態を報告しているが、我々の結果では愛着と比較して回避の感情を回答した割合が高かった。思春期が子育ての悩みや苦痛などの母親の心理的負担を敏感に感じとっていると推測された。

### (5) 結婚観について

結婚否定派が過半数であった上に、結婚肯定派の中にも「1人だと大変」「身の回りの世話をしてほしい」という家事援助を理由にした回答、「ひとりっ子だから跡継ぎが必要」「親を安心させたい」という理由のほか、「ウエディングドレスを着たい」「教会で結婚式をやりたい」「大恋愛をして祝福されたい」など、結婚後の生活ではなく、結婚式に対する憧れを抱いている者もあった。その他、同じ「結婚したい」でも「家を出たいから」という理由も認められた。全体として、結婚生活そのものを積極的に肯定する回答はごくわずかであった。

少子化の要因の1つとして、西岡<sup>4)</sup>は晩婚化が進む理由として、結婚に積極的な夢や希望が感

じられない、と指摘しているが、我々の結果においてもこの内容を指示する傾向を得た。

#### (6) 子どもを持ちたいか

多くの思春期が少子高齢化の社会を問題視していたが、「自分は子どもを望まない」と回答していた。思春期の意識では、現代社会における出産・育児は時間的、金銭的および体力的に、かなりの負担を強いられると認識されていた。

一方、「結婚はしなくても子どもだけは欲しい」という回答もみられ、シングルマザーなど今日の生活スタイルの多様化を反映した<sup>4)</sup>結果と考えられた。

#### (7) 高齢者とのふれ合い体験

高齢者と同居経験のある者は、休日や放課後に一緒に過ごすことが多く、余暇の時間を家庭内で共有している例が多かった。また幼少時から、手伝いの延長として自然に介護を経験している実態が認められた。

同居の経験の無い者では「道を教えてあげた」「席を譲ってあげた」などのいわゆる親切行動のふれ合い経験の回答が多く、実際に手と手が触れ合うような生活介護の経験は少ないことが示された。

#### (8) お年寄りの気持ち

思春期の考える高齢者の気持ちは孤独感など、負のイメージが多数を占めていた。この結果は、1995年に高齢者を対象に調査された結果<sup>5)</sup>よりも割合が高く、思春期の視点から見た現代社会は、高齢者にとって暮らしにくく、必ずしも高齢者が大事にされない社会である、という認識が推察された。

#### (9) お年寄りの世話をしている人の気持ち

介護者の精神的な負担を感じとる回答が多く、老人介護に対する負のイメージが認められた。

#### (10) 自宅での介護の経験

自宅での介護は、「母親が疲れてかわいそうだった」という意見が多く、思春期は母親の身体的・精神的ストレスを認識していた。「父親が手伝わないので腹が立った」との回答も散見され、家庭内での介護が女性の仕事として位置付けられる傾向を否定的にとらえていた。身体的な疲労に加え、父親の精神的なサポートの不足、自分の親に対する介護への感謝の表現の不足が、思春期の介護へのイメージを悪化させる要因であると推測された。

「病人中心の生活で嫌だった」という意見の中では、母親の時間が介護に費やされ、子どもと接



する時間が少ない、話をする機会が減るため子どもが不満を覚える、寂しい感情を抱いた、などの経験を有する回答を得た。用事があって話しかけても「今おばあちゃんの世話をしているから」「忙しいからあとで」などと言われた経験を答えた者もあった。

その他、「母親が勤めを辞めた」との回答もあり、母親本人の意思でなく社会活動の機会が失われたことで「犠牲になっている」「かわいそう」と感じたり、「女は損」という意見も認められ、結婚観や家庭観に負に影響していると推測された。

#### (11) 自分が介護する立場になったらどうするか

低学年では「世話になった分頑張ってみる」「恩返しをしたい」など、肯定的な回答を得たが、年齢が上がるにつれ「出来ない」という回答が多くを占めた。高校生・大学生では「上手に出来ない」と申し訳ないから」「辛くて精神的に絶えられそうにない」「相手の気持ちがわからない」などの理由で介護に消極的になり「出来ない」と回答する例も認められた。

介護の経験の有無で比較すると、介護経験の無い者、およびボランティア経験のある者は、「少しならできるかも」「役に立たないけれどやってみたい」など積極的に参加しようとする回答を得た。一方、自宅で介護経験のある者は、「自分にはつとまらない」との意見が多く、実際に見てきたにも関わらず、介護に参加するという意見は少なかった。介護者の苦労を実際に知っているため、あるいは介護される側の不満を感じとるために、自分の知識では十分な介護が提供できないと感じていると推測された。

「自分の親ならばいいけれど配偶者の親はいやだ」という状況に応じて介護に介入していく、との意見もあり、介護者と介護される側の相性や性質、介護される側との人間関係も重要な要因であった。

#### (12) 在宅介護を希望するか

在宅介護を希望する理由として、「家のほうが気がラク」「施設はお金がかかる」が多かった。「在宅介護」を希望しない理由として「家族に迷惑をかける」「身内がもめるのを見たくない」「いやいや世話されるなら他人の方がよい」などの回答を得た。年老いてからも家族に囲まれて暮らしたいと願う考えは、思春期の意識の中では必ずしも多数派ではなかった。

#### 【まとめ】

1. 思春期の少子化への認識は、乳幼児の健やかな成長に対する負の影響を懸念していた。とくに母子の密着が成長の過程で好ましくないと認識されていた。
2. 育児に関しては「上手に育てないと自分が非難される」との認識が強く、育児に対し不安を持っていた。

3. 乳幼児との接触体験の無いまま親になることで不安が増していくことも考えられた。乳幼児ふれ合い体験など、母親になる前の段階での社会的なサポートの必要性があると考えられた。
4. 高齢者の気持ちについては、介護者の負担を気かけながら介護されているイメージが明らかになった。
5. 介護については、現代の若者は負のイメージで捉えていることがわかった。特に思春期では老親を介護する母親のストレスを感じとり、介護するのもしられるのも否定的に捉えられていた。

#### 【結語】

1. 思春期から見た「少子高齢化社会」は負のイメージであることがわかった。
2. 少子化が思春期の育児体験を減少させ、育児不安を増強させていた。
3. 思春期では、介護するのもしられるのも否定的に捉えられていた。この現状は、将来の介護意欲の低下につながると推測された。
4. 子どもは育児や高齢者介護のキーパーソンである母親の負担を敏感に感じとっていた。このことは子どもの抱く家庭観や子育て観にも大きく影響していた。
5. 母親の身体的・精神的疲労は子どもにしわ寄せがあり、母子関係に負の影響を与えていることがわかった。
6. 高齢者を介護する父親・母親のストレスは思春期の子どもたちにも影響を及ぼしている現状が明らかとなり、重大な問題を含んでいると考えられる。

#### 【参考文献】

- 1) 厚生省国立社会保障・人口問題研究所「人口問題に関する意識調査」平成7年 1995.
- 2) 近喰ふじ子：養育とストレス，現代のエスプリ別冊 現代のストレス・シリーズⅢ 現代的ストレスの課題と対応，123-134，1999.
- 3) 西岡和郎：高齢少子化が精神保健にもたらしたもの，臨床精神医学 増刊号：30-36，1998.
- 4) 高梨薫：高齢少子化時代の家族構造，臨床精神医学 増刊号：22-29，1998.
- 5) 総務庁長官官房高齢社会対策室「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」平成7年度1995.